

〈原 著〉

成人期の適応に影響する青年期・成人期の対人的要因

—17年後の縦断的データに基づく検討—

山岸 明子*

Analysis of interpersonal factors in adolescence and adulthood
that have an influence on adaptation in adulthood:

A 17-year longitudinal study

Akiko YAMAGISHI*

Abstract

The purpose of this study was to investigate quantitatively how interpersonal factors in adolescence and adulthood related to adaptation in adulthood using longitudinal data. Participants were 40 females who had answered the questionnaire in 1994 when they were nursing students, and participated in the longitudinal study in 2011. They answered the questionnaire consisting of Internal Working Models (mental representation of attachment conceptualized by Bowlby, abbreviated “IWM” hereafter) and interpersonal cognition related to IWM in two waves, and in 2011 the questionnaire included scales assessing adaptation—time perspective, resilience, and life satisfaction. The main results were as follows: 1) The three scales of adaptation and IWM and father’s warmth in adolescence were positively correlated, but mother’s warmth wasn’t. 2) IWM and nurturance were also correlated to the three scales of adaptation, and sometimes numerical values in adolescence outperformed those in adulthood. 3) By regression analysis using the step-wise method, it showed that variables predicting time perspective were ones of adulthood and that, as to predicting resilience and life satisfaction, variables of adolescence were important. These findings suggest that the sense of adaptation in adulthood is affected not only by IWM and cognition of the father in adulthood, but also by variables in adolescence measured 17 years earlier.

Key words: longitudinal study, adaptation, adolescence, adulthood

I. 問題と目的

Bowlbyの愛着理論²⁾に関する研究は近年の発達心理学のメインテーマの一つで、乳幼児期の愛着行動の測定法の開発(SSP)以来多くの実証研究がなされている。そして乳児期に成立する特定他者への愛着は幼少期にとどまらず、内的作業モデル

(IWM)として内面化されて生涯作用し続けるとされ、成人のIWMを測定する面接法(AAI)や質問紙法を使って青年期や成人期の実証研究も盛んになされている。愛着がどのようにして形成され、発達と共にどのように変化していくのか、そこに寄与する要因は何か、ある愛着のパターンをもつことが後の発達とどうかかわるのかについての知見も積み重ねられている(例えば数井・遠藤(2005)⁶⁾)。幼少期の養育者との愛着が安定したものである場合は、他者との関係において安心感をもちよい対人関係を

* 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科
Graduate School of Health and Sports Science,
Juntendo University

築きやすく、また安心感に基づいて探索することが可能であるため、その後の認知的・社会的発達が良好であるし、適応も良好になりやすいと考えられる。後の発達との関連については縦断的な検討が必要となる。幼少期からの縦断的研究は短期のものから長期のものまで様々な形で行われるようになり、幼少期の愛着のパターンとその後の愛着のあり方やIWMとの関連、つまり愛着の安定性と変動性等について多くの報告がなされている(長期の縦断的研究をまとめた著書としてGrossmann, Grossmann & Waters (2005)³⁾や三宅・高橋(2009)⁹⁾等がある)。

一方青年期以降の成人愛着と青年期以前の愛着との関連に関しては、以前の愛着は回想によってとらえられる場合が多く、回顧資料ではなく長期間prospectiveに検討する縦断的研究はまだほとんどなされていない(Klohnen & Bera⁷⁾は31年間の縦断的検討をしているが、質問紙法によるものであるし、青年期に関してはIWMとして測定されたわけではない)。他の領域に関しては、Werner & Smith (2001)¹⁶⁾やVaillant (2002)¹⁵⁾等の長期にわたる研究がある。Werner & Smith (2001)は幼少期にリスク要因をもっていた者を成人期にいたるまで追跡し(2001年のデータでは被調査者の年齢は40才にまで到達している)、幼少期のリスク要因の影響や成人期の適応を予測する要因等についての知見を得ている¹⁶⁾。Vaillant (2002)はハーバード大学の卒業生及び他の2つのコホートに60年間という長期間追跡調査を続け、老年期の健康と幸福度を規定する要因について検討している¹⁵⁾。あるいは反対にある時期にもたれた幸福感が後の適応(社会的地位や結婚率・結婚満足度、生存率等)と関連することが指摘されている(大石 2009)¹⁰⁾。このようにある時期の適応と別の時期の適応の関連を検討すること、どのような過去を過ごしていた者が、時間の経過と共にどう変化するかを長いスパンで縦断的に検討することは、生涯発達心理学の中心的課題といえる。

青年期から成人期にかけては、就職・結婚・出産・子育てと新たな人間関係を構築する機会が多く、「親密性対孤立」「生殖性対停滞」とそれまでと

は異なった新しい人間関係を適切に作ることで自我発達の課題になる。本研究では、新しい人間関係を適切に作ることで自我発達の課題になるこの時期の適応に対して、青年期に対人的な安定感をもちよい対人関係を築きやすい傾向をもっていたことがどの程度関与するののかについて、縦断的なデータによって検討する。つまり今まで縦断的に収集してきたIWMおよびそれとの関連が予想される要因、すなわち他者に対する養護性や現実をしっかりと見る力、両親の養育態度の認知に関する青年期のあり方が、成人期のIWMや適応とどの位関連するののかについて検討を行う。

山岸(2006¹⁷⁾他)は青年期に看護系の学生だった者を対象に、青年期から成人期にかけて縦断的研究を行い、IWMやそれとの関連が予想される対人的認知の変動性と安定性、そして変動に関与する要因に関する検討を行ってきた。その結果、時期が隔たっていても2時期の得点間の相関はかなり高いこと、また得点の変化のパターンと他の得点変化との関連が示された。更にその中で成人期に質問紙だけでなく面接のデータもある者についてより詳しい質的な検討を行い、青年期に記述してもらった生育史に見られる生育過程の様相、及び青年期と成人期に測定されたIWM得点のタイプと成人期の適応との関連について質的な分析も行っている(山岸2012²⁰⁾、2013²²⁾)。その結果、青年期と成人期のあり方が連続的な者と不連続な者が見られ、過去のあり方と現在の状況の両方の影響が示唆された。

本研究では、対人的認知に関しては今までと基本的に同じ項目を用い、成人期の適応との関連をとらえる。成人期の指標に関しては、今までは各時期の適応は、それらの時期の全体的印象(「楽しかった」～「つらかった」の4件法)で簡単にとらえるか、あるいは面接データによって質的な分析をしていたが、本研究では現在の適応状態をより多くの観点から質問紙法でとらえて数量的分析を行う。

現在の適応を見る尺度として1. 時間的展望 2. レジリエンス 3. 生活満足度の3つの指標を用いる。時間的展望¹¹⁾は1996年時の調査から使用してき

たが、各人の過去—現在—未来のとらえ方(過去を受容し、現在充実感をもち、未来に希望をもっているか)を適応感として用いる。レジリエンスは「逆境にあっても挫けず、一旦不適応状態に陥っても、立ち直る『精神的強さ』を表す概念」(Masten, 2001)⁸⁾であり、近年研究が盛んに行われ、様々な尺度が構成されている。現在の適応感そのものではないが、ストレスフルな状況に置かれても不適応にならないという意味で、今後の適応感を予測するものと考えられる。また現在の全体的印象だけでなく、より細かく生活上重要な様々な側面に関する満足度も尋ねる。

本研究は上記の研究²⁰⁾²²⁾に引き続き、より多くの被調査者(40名)を対象に様々な適応の指標を用いて、成人期の適応を規定する対人的要因は何か、青年期と成人期の変数がどのように関与しているのかについて縦断的データによって数量的な検討を行う。

II. 方 法

(1) 被調査者 1994年看護短大3年時に生育史を書いた99名の内、質問紙調査の依頼に同意した者40名(回答率80.0%)。年齢は37~39才。看護師22名、保健師6名、看護教員2名、養護教諭1名、助産師1名、専業主婦6名、その他2名。就労の形態は、常勤職が25名、パート8名、無職7名。既婚27名、独身13名(内2名は現在婚約中、3名は離婚経験者)。子どもがいる者24名(一人5名、二人14名、三人5名)。

(2) 調査時期

1回目—1994年5月 今回—2011年6月から7月。

(3) 手続き

1回目—生育史の課題をだし、回収時に質問紙調査を実施。今回—同窓会名簿に現住所を開示している者に質問紙調査の依頼をし、同意した者に質問紙を郵送して郵送法で回収した。

(4) 調査内容

【質問紙の質問項目】

1994年の調査項目に準じた項目1)から4)と、1996年からつけ加えた5)、今回新たにつけ加えた6)

7)から成る質問紙調査を行った。

1)現在の対人的枠組み(IWM) 詫摩・戸田(1988)¹³⁾が Hazan & Shaver (1987)⁴⁾を参考に作成したIWM尺度18項目(安定、アンビバレント、回避に該当する6項目ずつ)について5件法(とてもあてはまる5~全くあてはまらない1)で回答を求めた。

2)エゴグラム 対人的態度を見るものとして批判的親CP(2011年のみ施行)、養育的親NP、大人Aを各10項目ずつ(杉田(1983)¹²⁾を一部改変)について3件法(あてはまる3~あてはまらない1)で回答を求めた。

3)両親の養育態度 戸田(1990)¹⁴⁾の質問項目を参考にした14項目(母親、父親それぞれの暖かさ、統制、全体的印象)について、「子どもの頃のお母さんとお父さんに関して次のことはどの位あてはまりますか」として5件法で回答を求めた。

4)過去から現在の各時期の全体的適応感 1994年 ①幼少期 ②小学生時代 ③中学時代 ④高校時代 ⑤高校卒業以降の5時期、2011年は1994年の①から⑤と、⑥就職した頃 ⑦20代後半 ⑧30代前半 ⑨30代後半 ⑩現在の計10時期について、「どの時期にも楽しいこととつらいことの両方があったと思いますが、次の時期は全体としてどちらの思いの方が強いですか」として「とても楽しかった」「つらいこともあったが楽しかった」「どちらともいえない」「つらかった」の4つから回答を求めた。

5)時間的展望尺度 現在の適応状態をより詳しく見るために白井(1997)¹¹⁾の時間的展望体験尺度の中の「現在の充実感」「過去を受容」「未来への希望」各5, 4, 4項目を用い、5件法で回答を求めた。

6)レジリエンス尺度 山岸・寺岡・吉武(2010)¹⁹⁾の項目に Antonovsky (1983)¹⁾の首尾一貫感覚の項目の日本版(山崎, 1999)²³⁾の一部をつけ加えた29項目(新奇性追求・感情の統制・メタ認知・肯定的未来志向・楽観主義・関係性・首尾一貫感覚の7尺度から構成)に対して5件法で回答を求

めた。

7)現在の満足度 30代後半頃の女性にとって重要と考えられる領域として以下の9項目を設定した。

- ①生活全般 ②仕事の内容 ③仕事上の人間関係
④配偶者との関係 ⑤子どもとの関係 ⑥家族との関係
⑦経済的問題 ⑧自分の人間としての成長 ⑨その他で重要なこと(該当することがない場合は回答しなくてよいと指示) 各々に対して満足度を5件法で回答を求めた。

【倫理的配慮】1994年のデータについては順天堂大学医療看護学部研究等倫理委員会, 2011年のデータについては順天堂大学スポーツ健康科学部研究等倫理委員会の承認を得た。

Ⅲ. 結果と考察

(1) 2時期の各尺度の合成得点の算出

1) IWM 3)両親の養育態度 5)時間的展望の各尺度については, これまでの研究で因子分析を行い, ほぼ仮定通りの結果が得られているため, 仮定された項目ごとに合計点を算出し〔1)安定得点, アンビバレント得点, 回避得点, 3)母親の暖かさ, 統制, 父親の暖かさ, 統制, 5)現在の充実感, 過去の受容, 未来への希望〕, 1) IWM と 5)時間的展望に関しては, 更に各尺度を合計して総点も算出した(IWM 総点 = 安定得点 - (アンビバレント得点 + 回避得点) / 2, 時間的展望総点 = 現在の充実感 + 過去の受容 + 未来への希望)。

2)エゴグラム 6)レジリエンス尺度については全項目で因子分析を行った(主因子法・プロマックス回転)。2)については2因子解を求め, 仮定通りの因子負荷がなかった項目を除いて再度因子分析を行い, その結果に基づき養護性7項目, 現実性3項目の合計得点を算出した。6)についてはまとまりが悪かった「メタ認知」の項目や, 仮定通りの負荷がない, 2因子に高い負荷がある等不適切な項目をのぞき, 21項目で再度因子分析を行った。その結果が表1である。5つの因子は第1因子から順に「肯定的志向性」「関係性」「新奇性追求」「首尾一貫感覚」「感情の統制」と命名されたが, 5つの下位尺度間

の相関をみたところ「関係性」のみ他との関連が見られず異質であるため(表2), 「関係性」はレジリエンス総点から除き, 「新奇性追求」4項目「感情の統制」4項目「肯定的志向性」5項目「首尾一貫感覚」4項目の計17項目の合計得点を「レジリエンス総点」とした。

各尺度の α 係数を算出したところ, 両親の養育態度の統制は十分な値でなかったため, 以下の分析では使用しない。分析に使用する尺度の項目例と α 係数を表3に示した。

(2) 対人的要因の2時期の変化

対人的要因の2時期の平均値(標準偏差)とt検定の結果, 及び相関係数は表4の通りである。17年たってもどれも有意であり(但しIWMの不安は10%水準), かなりの関連があるといえる。これまでも同じコホートで11年後(N=51)²¹⁾, 別のコホートの19年後(N=15)²⁰⁾でも検討したが, コホートにより, また時期によりいくらか異なるが, 総じて相関は比較的高いといえる。2時期で有意差が見られたのは, 現実性(P<.01)で, 父親の暖かさは有意傾向(P<.10)であった。成人期になると青年期に比べて冷静に対処する傾向が上昇することが示された。

(3) 各時期内での要因間の関連

青年期及び成人期それぞれにおいて, 対人的枠組み(IWM)と他の対人的認知がどの程度関連しているか, 相関係数を算出した。IWMと養護性がプラスの相関(成人期.370(P<.05), 青年期.294(P<.10)), 青年期の母親の暖かさと父親の暖かさにプラスの相関が見られた(.412(P<.01))が, 他の関連は有意ではなかった。

現在の適応感尺度に関しては, 多面的にとらえるために時間的展望, レジリエンス, 生活満足度に関する回答を得た。それら相互の関連をみたところ, 1)時間的展望総点, 2)レジリエンス総点, 3)生活満足度全体の平均点相互の相関係数はどれも有意であった(表5)。また「現在の全体的印象」に関し

表1 レジリエンス項目の因子分析結果

	I	II	III	IV	V
11. 将来の見通しは明るいと思う	.701	.013	-.069	.210	-.092
5. 何事もよい方に考える	.656	-.062	.126	-.096	.023
4. 自分の未来にはきっといいことがあると思う	.620	.027	.116	.086	-.066
18. 自分の将来に希望をもっている	.605	.010	.081	.080	-.075
12. 困ったことが起きててもよい方向にもっていけると思う	.423	-.053	.078	.206	.169
13. 寂しい時や悲しい時は自分の気持を人に聞いてもらいたいと思う	.012	.883	-.007	-.037	.007
6. つらい時や悩んでいる時は自分の気持を人に話したいと思う	.078	.864	-.064	-.068	-.031
20. 迷っている時は人の意見を聞きたいと思う	-.116	.728	-.060	.126	.089
28. 自分の考えを人に聞いてもらいたいと思う	-.042	.610	.236	.019	-.021
15. ものごとに対する興味や関心が強い方だ	.080	.092	.730	-.014	.081
8. 新しいことや珍しいことが好きだ	.127	.048	.718	-.156	-.100
22. 私は色々なことを知りたいと思う	-.052	-.023	.712	.181	.034
1. 色々なことにチャレンジするのが好きだ	.178	-.091	.699	-.080	.020
14. つらい経験から学ぶことがあると思う	.130	-.022	-.109	.745	.039
21. 困難があってもそれは人生にとって価値あるものだと思う	.134	.017	-.093	.739	-.083
7. うまくいかないこともその経験が後で役にたつと思う	.147	.096	.008	.554	-.025
27. 大変だったがそれをくり抜けることで自分は成長したと思う経験がある	-.141	-.058	.159	.463	.182
16. いつも冷静でいられるようにこころがけている	-.201	.040	.014	.119	.743
2. 自分の感情をコントロールできる方だ	.291	.027	-.063	-.194	.616
9. 動揺しても、自分を落ち着かせることができる	.394	.006	-.145	-.076	.564
23. ねばり強い人間だと思う	-.192	-.036	.207	.140	.439
因子負荷量の平方和	3.910	2.920	3.930	3.360	2.389

太字 .4以上 回転前の累積寄与率 63.81%

表2 レジリエンスの下位尺度間の相関

	感情統制	肯定的志向	首尾一貫感覚	関係性	レジリエンス総点
新奇性追求	.433**	.756***	.432***	-.001	.847***
感情統制		.461***	.431***	-.318†	.708***
肯定的志向			.537***	-.138	.898***
首尾一貫				.138	.716***
関係性					-.096

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001 † p<.10

でも、1-1名、2-4名、3-27名、4-8名だったため、低群(1と2)5名、中群(3)27名、高群(4)8名の3群に分け、時間的展望、レジリエンス、生活満足度について分散分析をおこなったところ、3尺度とも有意な差が見られた(cf.表5)。「現在の全体的印象」は大雑把な尺度であるため、以後の分析では現在の適応感として時間的展望総点、レジリエンス総点、生活満足度全体の平均点を使用することとする。

表3 各下位尺度の質問項目の例とα係数

IWM		
安定	私は人に好かれやすい性質だと思う.	.804
不安	人は本当はいいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある.	.712
回避	どんなに困った時でも人には頼らない方だ.	.686
エゴグラム		
養護性	他人の世話をするのが好きだ.	.743
現実性	感情的というより理性的な方だ.	.610
養育態度		
母親の暖かさ	母親にやさしくしてもらった思い出があまり浮かばない(逆転).	.754
父親の暖かさ	自分はよい父親をもったと思う.	.850
時間的展望		
現在の充実感	毎日の生活が充実している.	.816
過去の受容	過去のことはあまり思い出したくない.(逆転)	.739
未来への希望	自分の将来は自分で切り開く自信がある.	.827
レジリエンス		
新奇性追求	ものごとに対する興味や関心がつよい方だ.	.834
感情統制	いつも冷静でいられるようにこころがけている.	.690
肯定的志向性	将来の見通しは明るいと思う.	.814
首尾一貫感覚	つらい経験から学ぶことがあると思う.	.783

〈注〉エゴグラムとレジリエンスの項目例は、因子分析の各因子で一番因子負荷が高かった項目

(4) 2時期の対人的要因と成人期の適応感との関連

成人期の3つの適応感の指標(時間的展望, レジリエンス, 生活満足度)と青年期・成人期の対人的要因との相関係数は表6の通りである。成人期のIWMと父親の暖かさは適応感の3つの指標との間

表4 対人的要因2時期の平均値(標準偏差)と差の検定, 相関係数

	1994	2011	t検定	相関係数
IWM	4.33(11.30)	2.98(11.02)		.648***
安定	18.80(4.21)	18.35(4.02)		.692***
不安	17.78(4.20)	17.18(3.38)		.485**
回避	15.50(3.51)	16.55(3.16)		.298†
養護性	2.59(0.32)	2.56(0.34)		.539***
現実性	1.87(0.51)	2.26(0.56)	3.27**	.423**
母親暖	4.21(0.55)	4.08(0.75)		.562***
父親暖	4.12(0.78)	3.95(0.86)	1.69†	.715***

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001 † p<.10

表5 現在の適応感尺度相互の関連

	相関係数		分散分析 (現在の全体的印象)
	レジリエンス	生活満足度	
時間的展望	.564***	.603***	10.69***
レジリエンス		.456***	12.91***
生活満足度			3.61*

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001 † p<.10

表6 成人期の適応感の3つの指標と2時期の対人的認知との関連

	時間的展望		レジリエンス		生活満足度	
	青年期	成人期	青年期	成人期	青年期	成人期
IWM	.523***	.579***	.546***	.484***	.365*	.290†
養護性	.308†	.121	.302†	.288†	.468**	.283†
現実性	.176	.011	.161	.184	.327*	-.009
母親暖	.182	.183	.100	.095	.241	.218
父親暖	.175	.293†	.194	.299†	.276†	.432**

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001 † p<.10

にプラスの相関が見られている(一部10%水準)。父親の暖かさが弱いと関連を示している一方、母親の暖かさとは関連が見られなかった。

そして青年期に測定された対人的要因の内、IWMや養護性も成人期の3つの適応感の指標と関連が見られ、相関の値が成人期のものを上回る場合もあった。IWMは時間的展望及びレジリエンスとの間に.5台と中程度の相関、養護性は3指標とも青年期の方が値が高く、また生活満足度は青年期の現実性とも関連が見られている。成人期の対人的認知が適応感の指標と関連するだけではなく、17年前に測定された青年期の対人的認知も関連していることが示された。

以上のように成人期の適応感に両時期の対人的要因が関与していること、青年期の要因の関与も大きいことが示されたので、関与の大きさを重回帰分析によって検討した。従属変数として適応感の3つの指標、独立変数として両時期のIWM、養護性、現

実性、母親の暖かさ、父親の暖かさの10変数をステップワイズ法で投入した。その結果は表7の通りである。時間的展望は成人期のIWMと父親の暖かさが投入され、現在の要因の関与が強いが、レジリエンスと生活満足度に関しては、レジリエンスには青年期のIWM、生活満足度には青年期の養護性が第1に投入されており、青年期の要因の関与の強さが示されている。成人期の適応感を規定するものとして、成人期のIWMや父親認知の関与が示されたが、それだけでなく17年前に測定された青年期の要因も関与していることが示唆されている。

(5) レジリエンスの下位尺度と対人的要因との関連

(4)でレジリエンス総点と対人的要因との関連を検討したが、レジリエンスは様々な下位尺度から成っているため、有意な関連が見られた4つの対人的要因と4つの下位尺度との相関係数も算出した(cf.表8)。ここでも成人期の要因との関連と似た関連が青年期にも見られることが多く、IWMと新奇性や肯定的志向性、エゴグラムの現実性と感情統制は両時期とも有意な相関、多くは.4から.5程度の相関が見られた。特にIWMは両時期とも関連が見られる場合が多いので、成人期の影響を除いた偏相関係数も算出した。青年期のIWMと首尾一貫感覚の偏相関は有意であり(肯定的志向性も10%水準で有意)、青年期に安定した対人的枠組みをもっていることが、その後の首尾一貫感覚を培う可能性が示唆

表7 成人期の適応感を規定するもの—重回帰分析

従属変数	β (標準偏回帰係数)		R ² (調整済)
時間的展望	IWM 2011	.573***	.415*** (.383***)
	父親暖 2011	.283*	
レジリエンス	IWM 1994	.546***	.298* (.280*)
生活満足度	養護性 1994	.360*	.300** (.262)
	父親暖 2011	.303*	

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001 † p<.10

表8 レジリエンスの下位尺度と2時期の対人的要因との相関係数(IWM:成人期をpartialoutした偏相関係数)

	IWM			養護性		現実性		父親暖	
	青年期	成人期	偏相関	青年期	成人期	青年期	成人期	青年期	成人期
新奇性追求	.405**	.439**	.176	.234	.289†	.040	.023	.103	.290†
感情統制	.331*	.263	.218	.143	.210	.329*	.462**	.103	.105
肯定的志向性	.511***	.493***	.290†	.252	.164	.189	.076	.180	.390*
首尾一貫	.427**	.274†	.340*	.218	.183	.140	.115	.054	.091
レジリエンス総点	.546***	.484**	.348*	.302†	.288†	.161	.181	.194	.354*

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001 † p<.10

されている。現実性とレジリエンスの感情統制は重なるところがあると考えられるが、両時期とも関連が見られた。父親の暖かさは青年期にはレジリエンスに関与しない一方、成人期においては肯定的志向性や新奇性と相関関係があり、成人期に幼少期の父親にプラスのイメージをもっていることと、現在のレジリエンスの特にその中の現在の生き方の積極性となつてつながりがあることが示されている。

IV. 討 論

本研究では1994年看護短大3年時に質問紙調査に回答した者40名に、17年後に縦断的な調査を行った。質問紙調査は青年期・成人期の2時期にほぼ同じ質問項目—IWM、及びそれとの関連が予想される対人的認知(エゴグラム)のNP、A、子ども時代の両親の認知)、生育過程の各時期の全体的印象—で行い、成人期に関しては現在の適応を見る尺度として時間的展望の他に、レジリエンス、生活満足度の3つの指標をつけ加えた。

2時期の結果の比較については、これまでも縦断的検討を行い、2時期間の得点間の相関はかなり高いことが示されてきたが²¹⁾、更に時期が隔たった今回も同様の結果であった。

以下に成人期の適応感を規定する対人的要因は何かの問題について2点述べる。

1)成人期の適応感を規定するのは現在の要因か、青年期の要因も関与するのか

2時期の対人的要因と適応感との関連に関しては、成人期のIWMや養護性、父親の暖かさと成人期の適応感の3つの指標との間にプラスの相関が見られたが、それだけでなく、青年期の対人的要因も成人期の適応と関連すること、時に相関の値が成人期を上回る場合もあることが示された。IWMはその後の適応に関与するとされているが²⁾、本研究では17年間という長い間隔を経ても、以前の対人的枠組みのあり方が適応に影響することを縦断データにより実証的に示すことができた。更に重回帰分析でも、時間的展望には成人期のIWMが大きく寄与し

ている一方、レジリエンスと生活満足度では青年期の要因の寄与の方が大きいという結果だった。

適応感の1指標のレジリエンスに関しては4つの下位尺度との関連についても検討したところ、ここでも成人期の要因との関連と似た関連が青年期にも見られることが多く、青年期に安定した対人的枠組みをもっていることが将来のレジリエンスにつながることを示された。特に青年期のIWMは現在の首尾一貫感覚との関連に関して、成人期の影響を除いた偏相関係数においても有意であり、対人的枠組みの安定性がより広範な世界に対してもたれる「把握可能感・処理可能感・有意味感」に長期的な影響を与えることが示唆されている。安定したIWMをもっているということは、その時々への適応にとどまらず、うまくいかない時にも挫けずに対処していけるというレジリエンスが含まれていると考えられるが、そのことを実証的に示すことができたといえる。

2)生育過程での父親のとらえ方と適応感

1)で述べた様に、IWMや養護性は青年期のあり方が現在の適応感に影響する場合が多かったが、子ども時代の父親の認知に関しては、現在の認知が適応感と関連する一方、青年期の認知とは関連性は見られなかった。レジリエンスの下位尺度別の検討でも、青年期と成人期の対人的要因はほぼ同様の関連を示していたが、父親の暖かさに関しては、成人期に認知された父親の暖かさは肯定的志向性や新奇性と有意な相関関係がある一方、青年期には関連は見られなかった。成人期に幼少期の父親にプラスのイメージをもっていることがレジリエンスの中の積極的な生き方となつてつながり、このことが生活満足度との関連をもたらししていると考えられる。

父親との関係がよい女子青年は適応的であることを示す研究は多く(例えば伊藤(2001)⁵⁾)、また女子青年において父親と親密な娘はレジリエンスの新奇性や肯定的未来志向が高い傾向が報告されている(山岸, 2010)¹⁸⁾が、成人期女性でも同様な傾向が見られることが示された。但しその関係は青年期のIWMが成人期の適応を規定するというような、長期的な影響とは異なるといえる。

本研究では青年期に測定された対人的要因が17年後の成人期の適応を規定しているかを縦断的なデータによって検討し、現在の対人的要因だけでなく、17年前の要因も関与していることを示すことができた。縦断研究は過去のデータについては取り直すことはできないため、不備がみつかったとしても基本的に以前と同じ質問項目を使わざるをえないという限界があるが、限られた要因ではあるが青年期の対人的要因と成人期の適応との関連についての長期にわたる影響を明らかにすることができたと考える。但し本研究で得られた結果は、本研究の対象が全員女性且つ看護系短大の卒業生であり、全員が看護職としての経験をもち、現在もその仕事を続けている者も多いという特殊性が関与している可能性があることをつけ加えておきたい。より偏りのない対象でも研究がなされることが望まれる。

今後面接調査で得られたデータを用いて、青年期の対人的要因の成人期への影響について個別に詳しく検討していくと共に、更に縦断的検討も進めたいと考える。

文 献

- Antonovsky, A. (1987/2001) 健康の謎を解く—ストレス対処と健康保持のメカニズム. 山崎喜比古・吉井清子訳. 有信堂. (Unraveling the mystery of health: How people manage stress and stay well. NY: Jossey-Bass.)
- Bowlby, J. (1973/1977) 母子関係の理論 II 分離不安. 黒田実郎他訳. 岩崎学術出版社. (Attachment and loss. Vol. 2: Separation: Anxiety and anger. London: The Hogarth Press.)
- Grossmann, K. E., Grossmann, K. & Waters, E. (2005) Attachment from infancy to adulthood: The major longitudinal studies. NY: The Guilford Press.
- Hazan, C., & Shaver, P. (1987) Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality & Social Psychology*. 52, 511-524.
- 伊藤裕子 (2001) 青年期女子の性同一性の発達—自尊心, 身体満足度との関連から. *教育心理学研究*. 49-4, 458-468.
- 数井みゆき・遠藤利彦 (2005) アタッチメント—生涯にわたる絆. ミネルヴァ書房.
- Klohn, E. C. & Bera, S. (1998) Behavioral and experiential patterns of avoidantly and securely attached women across adulthood: A 31 year longitudinal perspective. *Journal of Personality & Social Psychology*. 74-1, 211-223.
- Masten, A. S. (2001) Ordinary magic: Resilience processes in development. *American Psychologist*. 56-3, 227-238.
- 三宅和夫・高橋恵子 (2009) 縦断研究の挑戦—発達を理解するために. 金子書房.
- 大石繁宏 (2009) 幸せを科学する—心理学からわかったこと. 新曜社.
- 白井利明 (1997) 時間的展望体験尺度の作成に関する研究. *心理学研究*. 65-1, 54-60.
- 杉田峰康 (1983) こじれる人間関係. 創元社.
- 詫摩武俊・戸田弘二 (1988) 愛着理論からみた青年の対人態度: 成人版愛着スタイル尺度作成の試み. *東京都立大学人文学報*. 196, 1-16.
- 戸田弘二 (1990) 女子青年における親の養育態度の認知と Internal Working Models との関連. *北海道教育大学紀要 第一部 C, 教育科学篇*. 41-1, 91-100.
- Vaillant, G. E. (2002/2008) Aging well: Surprising guideposts to a happier life from landmark Harvard study of adult development. NY: Little Brown & Company. (50歳までに「生き生きとした老い」を準備する. 米田隆訳. ファーストプレス.)
- Werner, E. E. & Smith, R. S. (2001) Journeys from childhood to midlife: Risk, resilience, and recovery. NY: Cornell Univ. Press.
- 山岸明子 (2006) 対人的絆組みと過去から現在の対人的経験のとらえ方に関する研究. 風間書房.
- 山岸明子 (2010) 大学生のレジリエンスと両親への態度・認知との関連—性差に着目して—. *順天堂大学スポーツ健康科学研究*. 2-3, 87-94.
- 山岸明子・寺岡三左子・吉武幸恵 (2010) 看護援助実習の受け止め方とレジリエンス(精神的回復力)及び自尊心との関連. *医療看護研究*. 6, 1-10.
- 山岸明子 (2012) 青年期から成人期の対人的絆組みと対人的認知—19年後の縦断的研究—. *順天堂大学スポーツ健康科学研究*. 3-4, 209-218.
- Yamagishi, A. (2013) The stability and changeability of internal working models and interpersonal cognition from late adolescence to early adulthood: An 11-year longitudinal study of nursing students. *School of Nursing*

- and Health Care Juntendo University Iryo Kango Kenkyu. 11, 18-26.
- 22) 山岸明子(2013) 青年期に記述された生育史の良好さと成人期の適応との関連—内的作業モデルを手がかりにして—. 青年心理学研究. 25-1, 29-43.
- 23) 山崎喜比古(1999) 健康への新しい見方を理論化した健康生成論と健康保持能力概念 SOC. Quality Nursing. 5-10, 81-88.
- (平成25年9月3日 受付)
(平成25年10月15日 受理)